

佐中 孜・二瓶 宏

〔目的〕本研究は、当帰芍薬散の慢性腎不全に対する進行抑制効果を明らかにするために、柴苓湯と当帰芍薬散の慢性腎不全の進行に及ぼす効果について比較検討したものである。

〔対象ならびに方法〕対象は、低蛋白食事療法が実施され、当院にて月1～2回、フォロー・アップされている慢性腎不全患者28名（ 54.0 ± 16.8 歳）である。これらの患者を2群に分け、それぞれに柴苓湯、当帰芍薬散を投与した。薬剤投与後の観察期間は、3カ月～2年である。慢性腎不全の進行は、血清クレアチニン値の逆数（ $1/\text{Cr}$ ）と時間経過（年）で作られる勾配によって判断した。

〔成績〕 $1/\text{Cr}$ 時間勾配は、柴苓湯、当帰芍薬散のいずれも投与されていない観察期においては、それぞれ -0.207 ± 0.146 、 -0.175 ± 0.096 であり、両群に有意差は認められなかった。試験期では、柴苓湯を投与してほとんど変化がないのに対して、当帰芍薬散投与した場合は、 -0.029 ± 0.142 （ $p < 0.01$ ）と、平坦化傾向が認められた。また、柴苓湯投与群は、全例が透析療法に導入されており、その血清クレアチニン値が 6mg/dl を超えてから透析療法開始までの期間が $2.5 \sim 6$ カ月であった。これに対して、当帰芍薬散群は、透析療法への導入症例は1例にとどまっていた。

〔結論〕以上のように、柴苓湯は、クレアチニンクリアランス 30ml/min 以下の慢性腎不全に対しては十分な進行抑制効果を発揮しないが、当帰芍薬散は、そのような腎不全に対しても進行抑制効果を示す作用があるものと判断された。

6. 放射線治療に伴う下痢に対する柴苓湯の効果

(放射線科) 大川智彦・喜多みどり・兼安祐子・田中真喜子・唐澤久美子

〔目的〕腹部悪性腫瘍患者の放射線外部照射に伴う下痢に対する柴苓湯の効果について報告する。

〔方法〕対象は放射線の骨盤への外部照射を施行した子宮癌、直腸癌などの腹部悪性腫瘍患者で、照射期間4週間以上、総線量 40Gy 以上のものとし、電話法により柴苓湯投与群、非投与群の2群に分けた。柴苓湯は1日 9.0g 分3を照射開始時から終了時まで継続投与した。

〔結果〕登録症例は137例で、不適格例1例を除く136例を解析対象とした。その内訳は投与群、非投与群各68例で、両群の患者背景に有意な偏りは認められなかった。有効性解析対象130例の軟便および水様便の発現頻度は2群間に差を認めなかったが、抗癌剤および下剤が投与された症例を除いた放射線治療のみを施行した症例については柴苓湯投与群で軟便および水様便の発現頻度が低下し、年齢69歳以下、1回線量 2.0Gy 以下、照射野 $16 \times 16\text{cm}$ 以下の群ではより高い効果がみられた。一方、問診カードを用いて証の判定を行ったところ、証であると推定された投与群では水様便の発現頻度が極めて低下したのに比して、証でないとは推定された投与群では発現頻度が逆に高くなった。随伴する症状については2群間に差を認めなかった。副作用については悪心のため安全でないとは判定された1例を除き柴苓湯によると思われる副作用は認めなかった。

〔結論〕以上の結果から、柴苓湯は腹部悪性腫瘍患者の放射線外部照射に伴う下痢の発現を抑ええる効果を有することが示唆された。

臨時東京女子医大 漢方医学研究会

日 時 平成6年1月27日（木）18:00～20:00

会 場 臨床講堂2

テーマ 「気の医学」について

最近、ある種のエネルギーとみられる「気」という概念が、中国を始めとして世界的にも注目されるようになりました。今回は、その「気」について興味をお持ちの先生方と御一緒に考えてみたいと思います。下記のようなプログラムを企画致しました。平成5年12月放映のビデオには、本学よりの2疾患の症例も含まれ、その治療効果について「気」と超能力の立場から邵錦先生に質疑応答に加わって頂きます。万障お繰り合わせの上、御出席下さいますよう、お願い申し上げます。

1. 「気」の概念

(第二病院内科I) 菊池長徳